

ダンブカーにはねられ障害児に……

私の手紙を、「夢ではないかと、家内と繰り返し繰り返し読み返しています」と書かれているのを読んだ私は、一日も早く行ってやらなければいけない、と思いました。

幸い、手紙を受け取って半月ばかり経った七月六日、大阪へ行く用事ができました。それでその日、大阪で講演を済ませると、直ちに帰途につき、岐阜羽島駅に途中下車いたしました。かねてそのことを知らせておきましたので、駅に出迎えてくれていた愛子ちゃんのお父さんに会い、案内されて、初めて愛子ちゃんの宅を訪れ、愛子ちゃんに会いました。

その時、愛子ちゃんは五歳五か月になっていました。(これがもう二年早かったらなあ、その時、またその後もしばしば思ったものでした)

家族は、父親、母親、小学生の兄、愛子ちゃん、この親子四人。また、お父さんの御両親がそれほど遠くない所に住んでいて、よく行き来している、ということも聞きました。

愛子ちゃんは、正常出産で、一歳半までは極めて順調に成長してきました。一歳半になってよちよち歩きができるようになって間もないころ、近くの国道で、通りがかっかダンブカーにはねられ、頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負いました。数日間、意識不明のまま生死の境をさまよい、奇跡的に命を取りとめることができました。

けれども、頭蓋骨陥没の後遺症がひどく、身体面でも、重度の障害児

になってしまいました。ただ、幸いだったことには、両親が協力して、愛子ちゃんの身体的な障害の、回復のための訓練に励みましたので、歩き方にぎごちなさはありませんが、とにかく歩けるようになっていたことは幸いでした。

あとで述べますが、知的な教育は、肉体の成長発達と密接な関連があるものであって、身体面の訓練と並行して進めることが大切です。その意味で、両親が愛子ちゃんの身体面の、回復のための訓練に励んでいたことは、大変に良かったと思いました。

そういう訳で、これから教えようとしている“漢字ゲーム”も、これなら成功する、という気がして、明るい見通しを持つことができました。

なお、これまで、知的な教育訓練の一つとして、愛子ちゃんの名前に用いられているひらがな“あ・い・こ”の三字を、毎日教えていること、しかし、それがもう一年にもなるというのに、この三字のうちの一字をも、まだ覚えて読めるようにならない、ということなども聞くことができました。

一年間学習しても、かなが一文字も覚えられなかったことや、言葉を覚え、言葉を使う能力の低いことについては、私は少しも心配しませんでした。これらは、知能が低いのですから当然のこと、漢字だったらきっと覚えるに違いないと考えていたからです。

そこで、『石井式漢字教育法』について、愛子ちゃんの両親に説明し、必ず毎日これを実行することを奨めました。その教育法というのは、“漢字遊び(または漢字ゲーム)”と私が名づけたもので、次のようなものです。